

第23回ペスタロッチー教育賞受賞者に、水谷修（みずたにおさむ）氏が選ばれましたので発表いたします。

【第23回ペスタロッチー教育賞 受賞者】

花園大学客員教授

水谷 修（みずたに おさむ）

【略歴】

1956年、横浜に生まれる。少年期を山形にて過ごす。上智大学文学部哲学科卒業。横浜市にて、長く高校教員として勤務。12年間を定時制高校で過ごす。

教員生活のほとんどの時期、生徒指導を担当し、中・高校生の非行・薬物汚染・心の問題に関わり、生徒の更生と、非行防止、薬物汚染の拡大の予防のための活動を精力的に行なっている。

また、若者たちから「夜回り」と呼ばれている深夜の繁華街のパトロールを通して、多くの若者たちとふれあい、彼らの非行防止と更生に取り組んでいる。一方で、全国各地からのメールや電話による様々な子どもたちからの相談に答え、子どもたちの不登校や心の病、自殺などの問題に関わっている。

その現場での経験をもとに、専門誌や新聞、雑誌への執筆、テレビ、ラジオなどへの出演、日本各地での講演などを通して、子どもたちが今直面している様々な問題について訴えている。

現在、花園大学客員教授、上智大学非常勤講師。

2014年4月より、毎週火曜日、テレビ朝日「ワイドスクランブル」に、レギュラーコメンテーターとして、出演。

（以上、「水谷修オフィシャルウェブサイト/あした、笑顔になあれ」より抜粋

<http://www.mizutaniosamu.com>）

【受賞理由】

この度の受賞にあたり、水谷氏のこれまでの実践のうち特に次の二点が高く評価された。

1. 危機にある子ども一人ひとりに直接手を差し伸べ、語りかけ、救ってきたこと

水谷氏は定時制高校の教師として生徒指導に携わり始めて間もなく、夜の繁華街に出始める。氏は徘徊する子どもらに声をかけ、話を聴き、自宅に帰るように優しく説き続けた。暴力団がその後ろにいたときは、身を挺して彼らを守った。また、電話や電子メールで救いを求めてきた子ども一人ひとりに、それがたとえ夜中であっても、耳を傾け、相談に乗り、命を絶つなど語りかけ続けた。大人に見捨てられ、自分自身を否定することしかできなかった子どもが、決してあきらめない氏の真剣さを通して、少しずつひとを、そして、自分自身を信じることができるようになり、生きることの危機から脱することができた。

2. 講演や著書を通じて、子どもらを追い込む社会病理を告発し、とりわけドラッグ問題について警鐘を鳴らし続けてきたこと

水谷氏は危機にある子どもらと直接触れ合うことを通して、彼らを取り巻く問題は、実は大人が作り出した社会の問題であることに気づく。子どもを利用し、騙し、捨てる。夜の街を徘徊し虚勢を張る子どもも、リストカットをして自らを傷つける子どもも、ドラッグに逃げ場を求める子どもも、みな大人が作り出した社会病理の犠牲者なのである。そのなかで最も喫緊の課題がドラッグの流布であった。理解ある優しい友人の顔をして、ドラッグは傷ついた子どもに近づいてくる。しかし、その中毒性のために、子どもらは恐喝や売春をしてまでも購入資金を得ようとし、やがてドラ

ッグ自体に体を蝕まれ、廃人と化す。子どもをそんな犠牲者としてしまう社会に日本がなりつつあることを、氏は数え切れないほどの講演と数多くの著作を通じて、警告し続けている。

これらの二点は、水谷氏の揺るぎのない教育哲学に支えられた実践であると言えよう。すなわち、危機にある子どもらを救うためには、大人が、そして社会が変わらなければならない、ということである。目に見える現象としては、問題を起こしているのは確かに子どもら当人であろう。しかし、この現象は、社会がそうした状況に子どもを追い込んでいるから生じているのである。子どもの問題行動を個人的な属性と見なしている限り、犠牲者は後を絶たない。子どもを騙し、利用しようとする大人の側が変わらなければ、事態は変わらない。一人ひとりの子どもを救いつつ、社会に変更を求め続ける氏の姿は、まさにペスタロッチーの姿に重なる。彼はフランス革命後の社会の混乱の中で行き場も将来への希望も失い、街をさまよう子どもを救うべく、シュタンツに孤児院を開いた。そこでの成果を教育方法の開発として一般化し、どのような状況にいる子どもでも学びうることを教育実践と文筆活動によって世に知らしめたのである。水谷氏の長年の努力と功績に対し、第23回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。

以上